

明治初期ギリシャ正教伝道史における士族信徒の政治

活動について

―三戸聖母守護会記録の一断面―

佐藤 和夫

はじめに

ここ数年来、私は東北北部地方プロテスタント史の研究に着手、若干の成果を発表してきたのだが、次第に旧教の分野に入り、中でもギリシャ正教史に目下関心を集中している。正教史はユニークな存在であり乍ら、研究上の盲点であり明治三十四年に出版された『日本正教伝道誌』以来、本格的体系的に著述された書は皆無と云つてよい。個別の論文もほとんどない。特にギリシャ正教は伝道史上必ず政治活動と深いかわりを持ち、明治政府からきびしい監視をうけた点から政治史上からも検討されるべき課題を多く有する。

右のような経過から二年前の酷暑の中、調査の機会に恵まれた盛岡ハリストス正教会の所蔵する『三戸聖母守護会記録』の記事中に、信徒の政治活動にかかわった内容のものが見出されたので紹介したが問題点を提示し、多くの方々から御教示を得たいものと願っている。

一 川村 貞次郎

盛岡ハリストス正教会（盛岡市高松、イオアン牧島純司祭）所蔵『三戸聖母守護会記録』信徒名簿に左の一項が見られた。

川村貞次郎 正吉長男 十三才十ヶ月 アナトレイ 明治七年十一月二十四日 明治十年五月十七日犯罪之廉有之捕縛、同十一年三月三十日国事犯ニ付除族之上懲役ニ処セラレタリ

右の項は同記録名簿中に抹消記事として扱われている。年令は受洗当時、アナトレイは洗礼を授けた司祭名である。この人物は明治六年末、ニコライ門人として反正証書を提出しない者として要警戒のリストにのせられている⁽¹⁾。

貞次郎がかかわった国事犯とは一体どういうことなのだろうか。年月から見て判断するかぎり西南戦争期間中であることから、南部地方を中心に謀議された「真田大幸事件」と何らかのつながりを考えざるを得ない。調査後漠然と推測の域を出ず、二・三の概説書で真田事件に関連したことを知るのみで確証を得られないでいたが、森嘉兵衛・

森ノブ氏の論文⁽²⁾によつて「真田大古陰謀始末」(岩手県文書)なる史料が紹介され、その中に貞次郎が歴然と同志として登場しており、これによつて「国事犯」の意味が明確になった。貞次郎は土族の身分を剝奪され懲役に服したが、その後追放され函館にゆき消息不明のまま生涯を終つたらしい。貞次郎には妻子があり深夜ひそかに一度会いに帰つたという(孫政太郎・京子夫妻談・現三戸在住)。

父正吉(政吉)は三戸聖母守護会の設立者で盛岡藩三戸土族の中心人物でもあつた。貞次郎は父正吉の影響を直接蒙つたのであるから、正吉について紹介しておきたい。『三戸聖母守護会記録』によると、明治三年八月二十七日アナトレイ司祭によつて洗礼をうけ、明治十年五月三十日永眠している。三戸玉岑寺に墓碑がある。丸い大きな自然石に「神僕彼得之墓^{ビートル・ヘテロ}」と刻まれており、永眠年月日も記録と一致する。明治三年受洗はもちろん秘密裡に行われたものだが、正教徒の中でも早い方に属する。その人柄については、太田弘三著『三戸名士列伝』(大正六年刊)の記事を引用して紹介しておく。

先生諱は政吉、通称隼太、後甚八郎⁽³⁾と改む、旧盛岡藩士三戸在住士の中位にあり性剛気果斷、殊に慷慨有為の士なり、金田流砲術を練修し其奥義を極め、狼煙の術最も功なり、門生来り学ぶもの幾百人孰れも慷慨の士気を涵養し原祐知と其交り親交なり、慶応元年国事を論じ本藩に建言し採用せられ盛岡支配となり移住して、国難に際し大に奔走する処あり、論ずるに勤王の大義を以てするも当時佐幕說多数に圧せられ其志を得ず、再び三戸に蟄居し、明治元年凶歉種穀欠乏各村農民の困苦見るに忍びざるものあり、先生之れを憂ひ、太田弘三氏に

謀り資金を調達して真田大古を随ひ⁽⁴⁾、三人相携ひ沼宮内に至り、八角伝之進を説き榎百俵を得て帰る、而して上郷村を始め各村に分配して農民を救済し、又藩主白石転封に際し、三戸以北は津輕越中守取締となりたるを奮慨し馬に鞭ち野辺地に至り、飯田記代七沿道七戸野辺地弘志五戸円子左右見を説き陳情書を調製し、各町村総代人百二十余名連署捺印して奥羽鎮撫使に提出す、津輕藩取締を解き黒羽藩の取締に変更したるは先生の力多きに依る、晩年に至り耶蘇教を信じ、明治二年正教会を開き、同志を集めて訓誨せり、是れ三戸宗教の嚆矢たり、明治十三年五月病に罹り臥床数閱月終に起ず、行年六十九、金光山玉岑寺に葬る、碑名神僕彼得之墓といふ。

正教会開始と死亡年に誤まりがあるが、三戸の指導的存在の大きさはほぼうかがわれる。

太田弘三は、現在三戸町のハリストス教信徒として籍をおく田島剛毅医師の曾祖父にあたる。

二 真田大幸事件

真田大幸事件については岡田益吉著『東北開発夜話』(河北新報社)、『概説八戸の歴史下』(丁藤欣一執筆、北方春秋社)、宮崎道生著『青森県の歴史』(山川出版社)、『岩手県史』、小野久三著『青森県政治史』(東奥日報社)等にその概要を説明しているが、事件の経緯について詳細な典拠史料に接することができないでいたところ、前掲森氏論文に「真田大古陰謀始末」が掲出され、その願望を満たすことができた。次に史料をして語ってもらおう。

一、明治十年四月二十七日

本県第一課雇小笠原定一ナル者に、友人二戸郡福岡村平民岩館辻太郎ナル者ヨリ、同月廿三日付ノ昼東ヲ郵寄シタルヲ以定一ヨリ直チニ該書東ヲ県庁ヘ密呈セリ、其文ニ云。

昨廿一日夜十一時耕田善藏、阿部良八來訪、僕其來ルノ時ナラサルヲ怪シミ、其來意ヲ問フニ云聞ク、秋田県鹿角青森県七大区、八大区ニ於テ不逞ノ徒暴発シテ、将サニ、西郷ニ応援セントスル説アリト、僕之ヲ聞テ愕然タリ、因テ憶フ賊或ハ不意ニ我カ郷里ヲ侵シ人民為メニ兵燹ニ罹ルモ測ルヘカラスト、更ニ思案ヲ擬シ、其巨魁ノ何人タルヤヲ問ヘハ、三戸ヲ煽動スル者ハ先年奥羽ノ修驗ヲ驚惑セシ者ニテ又曾テ報恩講ト称シ、同志ヲ結合シテ遂ニ禁固ノ刑ヲ受ケタル者ノ由、僕之ヲ聞テ云果シテ彼徒ノ巨魁ナレハ何事カナシ得ン、想フニ其未タ発セサルニ身先ツ捕縛トナラン^(己)、先ツ明日ヲ待ち事情ヲ採ラント相答ヘタルニ、二子龍婦ル、其翌五月廿二日小保内定身、下斗米与八郎ヲ訪ヒ、事情ヲ協議シ、下斗米常直ヲ三戸ニ走ラシメ同所友人北村礼次郎、一戸正綱ニ就ヒテ事情ヲ質サシメタレドモ其詳細ヲ得ス、然ルニ自然事実ノ明白ナラハ、布告ノ御趣意ヲ奉シ速ニ告発致シ度事ナレドモ前条曖昧ニテハ亦其運ヒニモ至ルヲ得ス、乍去亦黙々スルニモ忍ヒサル所アル、旁聊其略ヲ書シテ君ニ告ク、尚事実ノ詳細ヲ得テ告発セントスルモ社友皆赤貧ニシテ人ヲ四方ニ派遣スルノ力モナシ、故ニ只書牘ヲ各地ノ諸友ニ致シテ事情ヲ尋ルノミニテ、七戸八戸ノ形勢猶且審ニスル能ハス、余ハ跡ヨリ報スヘシ 草々

四月廿三日

小笠原定一君

この密書によつて県は驚き、早速官憲を福岡に密偵として派遣、耕田善藏から事情を聴取すると共に、耕田を真田一味に密偵として加入させた。耕田善藏は

(正吉)

川村甚之丞ヲ訪ヒ事情ヲ聞ントスレトモ甚之丞ハ容易ニ実ヲ告クルノ色ナシ、因テ善藏ハ故ラニ慷慨ノ意氣ヲ示シ云、君ノ謀略ハ僕既ニ之ヲ知ル故ニ來テ其事ヲ共ニセント欲シ、僕ノ肝胆ヲ吐露スルニ君ノ赤心ヲ示サムルモノハ抑々僕ノ其事ヲ共ニスルニ足ラスト為スカ、僕ノ不肖ナルモ同志十二名アリ以テ君ヲ助ケント欲ス、然ルニ今如此反覆弁論セシニ、甚之丞ハ太古ト俱ニ陰謀ヲ企ルノ事情ヲ稍吐露スルニ至ルト雖モ未タ其深意ヲ悉サス。

是ニ於テ善藏ハ已ニ其事ノ端緒ヲ得タレハ復タ敢テ推究セス、更ニ一

(貞)

手段ヲ思ヒ付甚之丞長男川村定次郎ヲ誘シテ三戸町ヲ距ルニ里許ナル田子村真清田神社ニ賽ス、其途中善藏ハ定治郎俱ニ人力車ニ乗り往復ノ際四方山ノ事共啗合スル内向キニ其父甚之丞ト談論セシ事ニ及ヒタルニ、定次郎モ亦陰謀ノ詳細ヲ吐露シ且檄文モ之アル旨云々セリ

(六)

是ニ於テ善藏ハ其手統ヲ問フニ甚之丞云、同志ノ者鹿角郡ニ豊口唯志、豊口仲之助、高橋嘉八等三十余名三戸郡ニ五十余名盛岡ニハ二百余名アリ、就中小田為綱ナル者ハ頗ル其事情ヲ知ル者ナリ、然而真田大古ハ方サニ青森ニ赴キ陰ニ有志結合ノコトニ従事ス、故ニ其結局ハ同氏ノ帰村ヲ待テ、更ニ議ヲ起サントスト、又其入費如何ヲ問ヘハ乃チ云、募集ノ人員ヲ以テ青森分営ヲ襲ヒ兵器彈

岩館辻太郎

薬ヲ奪、復タ県庁ヲ撃チ公金ヲ奪ハントス、然ルニ未タ募集人員ヲ青森ニ闖入セシムルノ資金ヲ得サレハ追テ大古ノ帰ルヲ待チ、其模様ヲ報告スヘシ、又云四月廿一日頃鹿角郡毛馬内村豊口唯志、豊口仲之助、高橋嘉八等私カニ三戸ニ還リ銃器刀剣類ノ運搬ヲ謀ラントス、然レトモ未タ前頭資金ヲ得ス因テ其運搬猶早キヲ謝シタリト乃チ善藏ハ大抵其事情ヲ聞キ更ニ他日ノ報知ヲ約シテ去ル此日常象（岩手県一等巡查、工藤）福岡ヲ発シ三戸ニ到ル途次真田大古ノ復歴ヲ探偵スルニ維新以降東京ニ飄白シ紙幣製造場ノ職工ト為リ間モナク退場示後所々羈游ノ末一兩年以前郷里ニ歸リ近來訴訟代言ノ業ヲ営ムト云。

これによつて計画の事実がはつきりつかめたのだが、父の甚之丞（正吉）の慎重さに比して若年の貞次郎は血氣にまかせ老獪な善藏のベースにのせられてしまったことがわかる。また小田為綱なる人物が盛岡側の重要人物として登場する。計画の詳細についてももう少し記録をたどつてみよう。

来ル四月廿五日ノ夜ヲ以テ事ヲ挙ケ青森ニ在テハ分営及県庁ヲ襲ヒ三井組ノ出店ヲ撃チ盛岡ニ在テハ小田為綱ノ手ヲ以テ岩手県庁ヲ襲ハシメント既ニ決シテ大古ハ青森ヲ指シ発程セリ

然ルニ人々退テ熟慮スレハ、今寡兵ヲ以テ事ヲアケ外援ナキトキハ一敗地ニ塗ルノ憂ナキ能ハス、因テ之レヲ甚之丞ニ諮ルニ亦僕等ノ議ヲ可トセリ、即チ人ヲ馳セテ大古ヲ中途ヨリ呼戻シ其議ヲ告ク、大古云、事茲ニ至ル、今ニシテ兵ヲ挙ケスンハ、何ノ日カ其レ成ラン、此期ニ臨ミ遷延センヨリハ寧ロ死スルニ如カスト（中略）盛岡ニテ事ヲ謀ル者ハ何人ナルヤ、答曰小田為綱、原裕知ナリ、殊ニ同

志高橋嘉八ナル者ハ、屢々盛岡ニ往来シテ其事ヲ議シタレハ盛岡ノ事ハ嘉八能ク之レヲ尽セリ、又銃器、彈藥ノ数ヲ問ヘハ、ミニヘール二十挺、和銃十挺、彈藥二三十貫目許ノ儲積アリト答ヘタリ、

（中略）金・米如何ヲ問フニ、浄法寺村豪農小田島勘治ヲ説諭シテ之レヲ出サシメント欲スト云ヘリ、橋（平尾）陸云、小田島ハ僕等モ亦着目スル所ナリト、且云秋田ニハ跡部ノ余党、茂木ノ党類將サニ応セントスル（中略）兵交ルノ日ハ何ヲ以テ彼我ノ兵ヲ識別スルヤ、二氏答紺股引ニ紺脚半、且草靴ヲ着タル者ヲ我兵トス、洋服ヲ着スル者ハ皆之レヲ斬ラントス、又其兵ノ配賦ヲ問ヘハ、二氏答青森ヲ襲フ兵ヲ三手に分チ一手ハ疲ク間道ヲ馳セテ毛馬内ニ入り、金銀山ヲ掠奪シ、一手ハ花輪ニ進ミ銅山ヲ掠奪シ、一手ハ七戸、五戸、三戸ヲ煽動シテ福岡ヲ経テ、浄法寺ニ入り花輪ノ兵ト合シ、再ヒ進テ盛岡ニ入り諸方ノ兵ヲ合セテ仙台鎮台ヲ破リ、遂ニ東京ニ入ラント欲スルナリト

この計画は当初から充分の準備に欠け武器彈藥・食糧・資金・兵力は全て奪取・調達・募集という有様であるから、今日の常識ではもちろん、当時でもその稚拙さは反乱やクーデターと呼ぶには大げさすぎよう。この未熟さは当事者自身がよく知っていたことは「今寡兵ヲ以テ事ヲアケ外援ナキトキハ一敗地ニ塗ルノ憂ナキ能ハス」と述べていることからわかる。しかし、「事茲ニ至ル、今ニシテ兵ヲ挙ケスンハ、何ノ日カ其レ成ラン、此期ニ臨ミ遷延センヨリハ寧ロ死スルニ如カス」という真田大幸の言葉に表現される切迫した危機意識が、あえて実行に踏みきらせるものとなつたと云えよう。

首謀グループが、明治三年の「報恩講事件」に関係した人達であったことを当局は驚いているが、この事件は、南部藩重役向井淡路頭・杉田齋宮・川村甚之丞（正吉）・桂助七等が中心となり、趣意書によれば、藩政の疲弊を無尽講の形で資金を集め再建すると云う名分で同志を糾合したというものである。⁽⁵⁾報恩講事件は結社の非合法性が問題であり、反体制的な意図が弾圧の対象になったと思われるが、一面では民政の経済的困窮の打開もまじめに考えられたのではなからうか。川村が明治元年に種穀欠乏による農民の困難を救済（三戸名士列伝）した実績も一考に価しよう。

真田大幸事件は結果から見ると成功の可能性の乏しい無謀なものであったと評価できようが、明治維新以来南部地方では地租改正の不公平な分担に対する農民の不满、明治九年四月の真田大幸の本拠地田子町農民三千人による、地租代米換金率の暴落・牛馬税増徴反対の二点の改善を叫んだ一揆が三戸を中心に緊迫した状況を生み出しており、更に政治的には、西南戦争への呼応というタイミングから、⁽⁷⁾騒起すれば勝算もあながち夢ではない、という期待がこめられていたのだろう。

三 小 田 為 綱

真田大幸事件は騒起以前にそれらしき動きは官憲のみでなく盛岡の有力者には察知されていたようであるが、この年の二月一日小保内定身宛那珂通高書簡にそれがうかがわれる。⁽⁹⁾

（前略）然ル処此頃花輪功一郎と田子の真田とやら不軌を図り候由

ニ而、三戸五戸福岡迄誰も其党か、彼も其仲間かと疑惑を抱き候は小子迄も同様ニ候、然らば縦令一時疑惑を受け候ものと雖も、功を以て而罪を補ふの目的を以て、従軍願差出し候分、当然之儀と小子限りは被相考候、戊辰之役叛逆首謀臣より、此様の勤王かましき儀如何には候へとも、畢竟為國家、旧主君此度こそ昔日之眞の勤王を表し可申時節に候得は、老兄末死之志を振起し、三戸中に就き而有用之小年輩を卒ぬ、馬を薩海に飲ましむる様被成度ものと奉存候、委細は新渡戸七郎より御聞取可被下候 以上

二月一日

那珂通高は東洋史学者那珂通世の父で若い頃は吉田松陰とも親交あり、戊辰の役では盛岡藩佐幕派楠山佐渡の参謀として活躍した。小保内は鈴木舍定の「求我社」と共に「会輔社」をひきいて岩手民権運動に指導的役割を果たした。当時福岡に在ったが那珂は渦に巻きこまれることを心配して小保内の自重を促したものである。もちろん小保内は動かなかった。民権派として真田のグループのゆきつくところを全国的視野から冷静に見つめる余裕をもっていたのだろう。

しかし、騒起派にはそれなりの理念があった筈で、次に述べる中心人物の一人小田為綱の草した檄文⁽¹⁰⁾によって、彼らの思想を検討してみよう。

吾国ノ坤輿ニ於ケル猶北辰ノ衆星ニ於ケルガ如ク、皇統一伝列聖相受ケ茲ニ三千年神州ト称シ君子国ト呼フ又宜ナラズヤ、今ヤ西郷隆盛西陲ニ新政府ヲ開キ大元師ノ名ヲ□シ、敢テ干戈ヲ執テ王師ニ抗ス、其乱義犯分共ニ天ヲ戴カサル寇タル固ヨリ論ヲ待ズト雖、彼

又一箇英物苟モ狂ヲ病之風ヲ憂フルニ非ズンバ何ニ由テカ此怪事ヲナサン、思フニ朝廷ノ有司天下ノ大計ヲ誤リ万世ノ大憂ヲ招クアツテ過激憤懣ノ余リニ出シナルベシ、嘗テ聞ク、外国ノ交際ハ往々國權ヲ失ヒ渠ノ鼻息ヲ仰テ彼ノ箝制ヲ受ケ五港ノ互市ハ年々千万円ノ損耗アツテ、一塵土ノ益利ナク樺太交換ハ險ヲ開キ敵ヲ招クモノニシテ貢租ノ苛刻ハ己レカ肉ヲ割テ食フニ等シ、其天崩ルル時ハ天下ノ民皆死ス、苟モ愛國ノ志アルモノ誰カ流涕長大息ナササル者アランヤ、是或ハ隆盛ノ起ル所以ナルカ、然リト雖天ニ二ツノ日アルナク地ニ二ツノ王アルナシ、日本政府ノ下豈政府ヲ置クノ利アランヤ、人臣ハ恭敬ヲ以テ上ニ事ヘ、忠諫ヲ以テ君ニ致ス、焉ゾ干戈ヲ執テ上ヲ要スルノ道アランヤ、王師ノ西征誠ニ止ムベカラサルナリ、然レトモ王者ノ軍ハ正ヲ以テ不正ヲ征スルモノナリ、又朝廷其政ヲ正サズ有司ノ罪ヲ問ハス唯ニ虚名ヲ揚ケテ彼ノ罪ヲ正スニ、彼恐クハ益々忿懣万心一決寧ロ死アルモ退クコトナカランノミ、嗚呼天皇陛下ノ民伐テ之ヲ殲スモ又何ノ快カ之アラン、是ニ依テ袖手傍觀スルハ実ニ志士ノ忍ヒサル所、請フ車ヲ馳セテ行在所ニ至リ大臣ニ面シテ不正有司ノ罪ヲ彈シ、天下ノ大計ヲ議シ、万世ノ大憂ヲ払ヒ、立トコロニ西征ノ師ヲ班シ、一朝ニシテ新政府ヲ破毀シ、更ニ英勇男児ヲ会シテ大改革ノ命ヲ四海ニ布キ、以テ列聖ノ余烈ヲ振ヒ今上ノ威徳ヲ海外万国ニ輝サント欲ス時機会アリ失フベカラス、諸彦モシ愚ヲ扶クルノ意アラバ書至テ来会セヨ

明治十年龍集丁丑念九日

内容は西郷の挙兵に対し反論するものではなく有司専制を批判、君

側の奸を排除するという点に論旨があり、民撰議院設立建白書にも似たトーンで貫かれている。又不平等条約による貿易上の経済損失、又千島・樺太交換条約による北方領土の危機感、対露警戒論にまで及び、新政府打倒による新国家の建設を説いている。

小田為綱は九戸郡宇部村出身、盛岡城下で漢学・武道を学び、江戸に出て儒家芳野金陵に経済・歴史・文学を学び、文久元年藩命により湯島聖堂昌平坂学問所の学生となった。当時、昌平校で学べるのは非常なエリート秀才であるから小田の非凡さがうかがわれる。修業後藩校作人館教授となり、明治三年、藩議院議員として上京、真田大幸事件後一年間の服役後は八戸の北村益の請により八戸義塾（一年で閉鎖）で教育に従事、明治三十年衆議院議員となり在職のまま五十九才で没した。

小田の政治思想は、儒学・国学の論理を基盤として、中央偏重の藩閥政治を批判、是正つまり郷土の朝敵という不名誉を回復、地方産業（鉱山事業）の振興を中心とする地域開発、特に明治六年に政府に上申した「三陸開拓案」に見られる開拓・鑄銭・道路・築港・教育にまたがる南部の総合開発をめざし士族授産による民生の安定にあった。

「薩長政府は五カ条の御誓文にそむき人民をだましている奸賊」「真の王政復古はわれわれ東北人の手によってやり直しをしなければならぬ、これこそ青年の義務である」という藩閥政治に対する批判は終始一貫したものであったろうが、同時に地域格差の是正という現実を常に忘れなかった。晩年はこのほかに神社制度の確立につとめ神社庁より感謝状を贈られたほどであった。

四 事件の評価

明治十年六月、岩倉右大臣宛岩手県令島惟精書状^(八日カ)⁽¹³⁾

(前略) 尚ほ以て青森県下陰謀一件、かねて具状仕り置候処、首犯
その外、追々各県にて就縛相成り、当県就縛の儀は、既に一応の吟味
候、結局相成り候へば将来取扱方など、不日司法省に相伺候心得ニ御座候、
右の外、当県ならびに隣県とも異常見届け仕らず、即今精々取締
罷り在り候へば、恐れながら御安意願い奉候

首謀者の真田大幸はじめ小田らは、青森・岩手・秋田三県合同の警察により五月十三日一斉検挙、中心人物六人(真田・小田・川村父子
山田政蔵・原祐知力)は弘前地方裁判所(この年三月末青森地方裁判
所弘前移転改称)で審問、判決があり懲役・土族除籍等の処分がなされ
れた。小田は檄文起草により禁錮一年、川村貞次郎は除族懲役に処せ
られたことまでは具体的にわかっているが、その他については残念な
ら目下のところ私にはわからない。川村甚之丞(正吉)は、偶然なが
ら一斉検挙直後の五月三十日病没している。この辺も謎というほかな
い。原祐知は明治二十二年に病没、その間奥入瀬川・切田川の分疏事
業を大光寺悦翁と共にに行い活動しているが、事件の処分については不
明、肝心の真田大幸については全く不明。大幸が田子町関の来満神社
別当で羽黒山系山伏の中心的人物であったという来歴について語られ
ることはあっても、それ以上の域を越えた人物研究がないのは不思議
である。大幸の同志野辺地郷土山田改(政カ)蔵についても同様であ
る。

この事件がたとえわずかでも蹶起が実行されていたなら、おそらく
歴史の表面にくっきりと浮かびあがっていたのだろうが、「陰謀」の
段階で未発に終ったため語り伝えられる程度の「伝説」的事件となっ
てしまった。処分された者達がほとんど名士としてその後社会的地位
を保てたのはそのためであろう。

そもそも真田事件は、前年(明治九年十月末)の東京日本橋小網町
「思案橋事件」につながると云われている。旧会津藩斗南藩士小参事
永岡久茂を中心とする旧会津藩士ら五名が、萩の前原一誠の蜂起に呼
応し、千葉県庁を襲撃、佐倉鎮台の兵を利用、日光の嶮により会津と
連絡、東西から新政府に対抗しようとするために、思案橋から小舟を
雇い千葉に乗り渡ろうとしたが、察知した官憲と衝突、切り合いとな
り逮捕されたのが思案橋事件である。永岡はその際の負傷がもとで、
翌十年一月十二日鍛冶橋の獄で死亡した。会津日新館より昌平校に学
び、戊辰戦争では英傑長岡総督河井継之助の下で従軍、奥羽連合策を
謀り失敗、斗南藩転住後は小参事となり、廃藩置県後は青森県田名部
支庁大属をつとめた。その才は中央政府からも囑望され、伊藤博文・
井上馨らに任官をすすめられた程であるが、もともと乱世の器で守成
の人ではなく自滅の道をたどった。⁽¹⁷⁾

真田大幸は維新後東京に飄白生活を送り、在京中に永岡と行動を共
にし、思案橋事件後三戸に行動の拠点を移したという。⁽¹⁸⁾ 推定するこ
ろでは斗南藩当時から両者の接触はあったのだろう。斗南藩は会津か
らの移住者一万七千余人が二戸郡(十二カ村四千石)、北郡(四十六
カ村八千七百石)、三戸郡(五十カ村二万二千石)に分散居住し会津

衆と呼ばれ南部領内で生活した。斗南藩の最大の領地は三戸郡で三戸五戸・十和田を含め南部藩士族との交流があった。¹⁹斗南藩の困窮ぶりは弘前藩から餼金一、五〇〇両を贈与されるほど同情をひいたが、それだけに斗南・南部士族の動向は当局にとって充分な監視が注がれた。このような中央・北奥の政治情勢を背景にした真田大幸事件は政治史的に重要な意味を含んでいるのであるから、質の高い史料の蒐集と精査、研究者の協力の下に事実を明らかにし、評価をしなければならぬ。

五 南部士族とギリシャ正教

三戸聖母守護会名簿の分析から、真田大幸事件が直接の関連問題として川村正吉・貞次郎父子の政治活動を具体的に理解できた。

本稿の目的はギリシャ正教徒としてのこれらの人々の活動の意味を考えることである。政治活動の基本理念である思想の理解なしには正しい評価は出来にくい。元来の南部地方の政治史にはこの視点からの検討がほとんどなされていない。

旧稿で私は青森県のキリスト教史の一応の整理を行い、その中で南部（八戸中心）の特色がギリシャ正教にあることを強調した。²⁰

ギリシャ正教が函館から南部地方を経て仙台までの太平洋側に強力に布教されたこと、入信の大部分がそれら地域の士族であったこと、それら地域の諸藩、斗南藩を含め南部・仙台・盛岡が旧佐幕の中核で新政府から冷遇されたことの不信感が根強かったこと、そのゆえにギリシャ正教及び正教徒の行動は新政府から厳戒されたことを指摘した。

津軽地方のプロテスタントが本多庸一の横浜遊学によってアメリカ流の雰囲気をも身につけたのに対し、南部地方のキリスト教徒は戊辰戦争の最後の決戦場となった函館でのギリシャ正教との接触によっているだけに血なまぐさい非壮感がただよう。後年ロシアとの対立からくる正教迫害にまでつながるのであるから悲劇的でさえある。

仙台藩士で函館軍の残党新井常之進は、明治二年の暮、仙台に潜伏中、旧友高屋仲に、これからの日本は「ハリストス教にあらざれば世道人心を維持するあたわず」と説き、その影響で仙台ハリストス教会が設立された。新井は明治三年森有礼に随行渡米、長期間生活し、無教会主義に転じ、足尾鉾毒問題の指導者田中正造を応援した。晩年、新井奥達（おうすい）と号した人物である。²¹

新井の同志金成善右衛門も廻天隊々長として函館戦争生き残りだが、函館時代ニコライの感化で正教徒になっている。東北伝道に中心的役割を果たした沢辺琢磨は、土佐士族で尊攘派志士であったがニコライの感化により日本人最初の正教徒となった。沢辺は「信仰は一身のためではなく救国のため」である²²と云っている。この考え方は即ち政治意識にもつながり、非合法な信仰活動は救国の志士活動となる。そのため、妻子・刀を犠牲にするのも当然であるという、²³本来のキリスト教の倫理意識と全く反対の倫理意識が生れる。救国意識は一般庶民にはほど遠く、士族集団にしか理解できないものだろう。反官的風潮は出発の当時から本質をなし、正教徒の集団性に疑義と警戒を抱かせたのも止むを得まい。「仙台教会の信徒は何れも士族の輩のみにて、商人としては当時更になかりき」²⁴というのが実情で、他の教会の例で

も大部分が同様の傾向を示している。

新政府設立間もない不安定期にあつて旧佐幕派の動向は無気味であるから、ギリシャ正教徒士族への対応は監視という消極的方法から棄教あるいは政治活動に関与しない（反正）を説得するという積極的方法を生み出した。青森県では学区取締りに命じ成功を見ている。

今般異教之行ハれ候も是全ク内教不晋カ故也、其社中（ニコライ派）ヲ見るニ多クハ破産道ヲ失ヒ候者或ハ固僻友を失ヒ候者也 御差支モ無之候ハ、僕等説諭反正いたし候様仕度奉存候尤反正之者ハ其証書為出可申候 又は反正いたし兼候者ハ猶其姓名ヲ書取可申上候（下略）

明治六年十二月十三日

伺の形式をとっているが正教徒を異教徒と見なし、更に異教警戒の理由として

（前略）

謹テ案スルニ政教一道ニ帰セサレハ人心自ラ一ナラスンテ海内一家親睦ノ御主意モ通徹仕カタキ儀ト奉存候 尤耶蘇教ノ如キハ君臣ノ父子ノ大義を乱リ、且耶蘇ヲ以テ直ニ造物主ト唱ヘ人心ヲ蠱惑シ政教一体の政事に於て尤障礙可仕哉奏存候間

（後略）

と述べている。⁽²⁶⁾ 信仰は救国のためであると説く正教と天皇中心とする神道派のイデオロギーが対極化されるのは当然で、一方が他を制しようとする時結局は力の論理（権力）がまかり通る。

ギリシャ正教がこのような国内問題から警戒されたほかに、別の理

由として対露警戒論のあることも付加しておきたい。明治二年十月二十五日新納立夫宛の大久保利通書簡で大久保は「北地之大難ハ旦夕ニ迫リ：其外外国人ハ其虚ヲ伺居候折柄……」と述べ、同年の別の書簡でも「魯国北地ヲ窺、皇国ニ誕ヲ垂ル……其難即チ今日ニ来リテ殃旦夕ニ逼ル処……危急今日ヨリ甚シキハナシ」（帰藩の際同志に頒ちし意見書）⁽²⁷⁾と危機感を訴えている。事実カラフトのクシュンコタン（母子泊）、シラスシに五百人の移住日本人とロシア人雑居、二年六月にロシアが占領するという事態が生じ、九月にイギリス公使パークスは外務大輔寺島宗則に、カラフトがロシア領になる危険性を指摘した程であった。⁽³⁰⁾ 翌三年三月に樺太開拓使が設置されたのはその対策のためであったことは勿論である。

真田大幸事件における小田為綱の檄文にも「外国ノ交際ハ往々国權ヲ失ヒ 渠ノ鼻息ヲ仰テ彼ノ箝制ヲ受ク、五港ノ互市ハ年々千万円ノ損耗アツテ、一塵土ノ益利ナク樺太ノ交換ハ險ヲ開キテ敵ヲ招クモノ」と北方政策に不満を表明している。植民地政策の先兵としての宗教の役割の例を鎖国時代に見てきた日本人にとって、ギリシャ正教を純粹に宗教として理解できないのも無理はない。ギリシャ正教徒の川村父子・原祐知らと共同歩調をとった小田の行動は矛盾するかのようであるが、反藩閥と現状打開という士族の意識が先行したものと思われる。この点、川村・原等の正教徒にとつても同じ意識に基いていたと云える。津軽の本多庸一、八戸の源辰、岩手の鈴木舍定、三戸の川村正吉・原祐知ら程度の差こそあれキリスト教理念の実践者として時代の先端に立った人物であること、本多・鈴木は別として南部士族が行動した

人脈の底に、ギリシャ正教が存在していたことを見逃してはならない。⁽³⁰⁾

真田大幸事件における真田・小田らの神道儒教色と・川村・原らのキリスト教色の混合は、一見奇妙のようであるが、現実には維新以来白河以北一山百文という東北軽視と冷遇からくる貧困打開のための士族授産・地域開発、ひいては藩閥打倒、北方領土警戒という「救国」意識ナショナリズムがどこかでつながっていた、としか考えられない。

ギリシャ正教徒を生み出した政治的背景は今まで述べてきた通りであるが、彼等をリーダーとした必然性は、彼等が多くはエリート士族であり、明治初期のキリスト教信者が地縁的血縁的、そして特権的集団性を多分に有していたという連帯感から生れたものであった、と説明し得るのではなからうか。

おわりに

わずか一行の抹殺記事の中に激変の時期を生き、その波にもまれた運命のあったことを尋ねてみた。同時にこれだけの政治・社会上の複雑さを背景にした重要な事件でありながら詳細な史料・資料の蓄積がほとんどなされていないことにはがゆきを覚える。『九戸郡誌』は国会図書館にすら架蔵されていない。『三戸名士列伝』に至っては幻の著でコピーに頼ったような始末であり、まして原文書に至っては採訪者の手控えが限度であろう。「小田為綱日記」の存在は森喜兵衛・ノブ氏によつてはじめて知つたが、「真田大幸日記」も部分的に存在するようである。登場人物についてもほとんどが謎である。川村・原・山田政蔵・豊田唯志・仲之助・高橋嘉八そして大幸の事件を中心にその人間関係その後の生

涯・思想等を明らかにする必要がある。更に、現存する有縁の方々から思い出をひき出すことも重要なことである。筆者は南部から距だった遠方に住み、教育現場の第一線で働き研究生活にほど遠い場において、時間的・経済的に精査の機会に乏しいので、地方史研究の成果を心待ちにしており、数々の学恩をうけた。本稿もそのような期待をこめて問題提起をしたつもりである。種々御教示をいただければ幸いである。最後に史料調査を快く許して下さった盛岡ハリストス正教会牧嶋純司祭・御夫妻、三戸町川村政太郎・京子氏御夫妻、医師田島剛毅氏、三戸城温故館館長佐藤嘉悦氏、三戸高教諭橋本正信氏、論文上新史料を引用させていただいた岩手大学森嘉兵衛・森ノブ両氏の方々に心からお礼申し上げたい。

(昭和四十九年八月十九日)

〔註〕

- (1) 青森県庁所蔵文書 明治六年十二月十三日五戸支庁宛異教制禁
何之写

- (2) 「明治前期の政治思想について」小田為綱の思想を中心として
一 (岩手大学教育学部研究年報二十七、昭和四十二年)

- (3) 前掲「青森県庁所蔵文書」及び「真田大古陰謀始末」によると貞次郎は甚之丞長男となっており、正吉は甚之丞と名のつたように思われるが、正吉父文左衛門も甚之丞で(川村家文書)、二代続いて同じ名前を使用したものか。

- (4) 原祐知は「盛岡十字教会記録」によると、明治七年七月受洗正

教徒となり、娘婿が原十目吉で、十目吉は八戸光榮教会設立の中心メンバーとなっている。祐知は本姓工藤、通称数馬、維新後原祐知と改め翠葉亭竹山と号した（『三戸名士列伝』）。明治二十二年六十五才で没。

(5) 野田玉造宛石亀左司馬書簡（野田玉造文書、森論文所収）

（前略）昨年来之疲弊ニ又献納金ニ付、弥増疲弊致し事ニ候得者、此後勤王実効相立前罪可奉償之時機有之ト雖トモ疲弊之為ト窮蹙自然其機会ヲ失ヒ、此上諸藩ニ後レヲ取ル次第ニ而ハ、上者奉対朝廷、下ハ諸藩ニ向何之面目可有之哉、実ニ社稷之存亡君臣ノ榮辱安カラザルノ秋ト人臣之情難黙止処ニ候、然共今ニ至リ外ニ手段モ無之処ヨリ社中誓書盟文之通、大商ヲ開キ其利潤之一分ヲ献金ト備、御上入用之一毛ヲ奉備、一分ハ社中兵備之助補トナシ事」

(6) 生産力の低い南部の耕地にもとづいた年貢が地租決定により訂正され、従前より高くなり津軽の有利さに比して不利を強いられた（『概説八戸の歴史下1』68～70ページ）。

(7) 地租換金の米代が、換金米の一時殺到のため、八年十一月当時石当り七円九十六銭から翌年三月には、一挙に四円二十五銭に暴落した。又重要な副業の一つであった牛馬売買への課税増徴が不満に拍車をかけた。結果的には地租の分割納入という形で解散したが、基本的には何も解決しなかった（全石書71～72頁）。

(8) 真田大幸グループの計画には盛岡藩旧家老花輪図書の子香一郎（功）を形式上の盟主とし、野辺地郷土山田改蔵が真田と共に事実上の

首謀人物としていたと云われ（柏崎記―『概説八戸の歴史下1』所収）、南部領以外でも水沢・会津若松にも連絡があり（岡田益吉『東北開発夜話』）、九州佐土原藩家老高島英孝なる人物も東北へ潜入して逮捕され、青森監獄の獄中ですでに投獄されていた真田大幸と獄舎を共にして、「鉄窓記」なる書をしたためたと云われる（中村元吉所蔵資料八小枝長七による調査報告Ⅴ、及び柏崎記『前掲・八戸の歴史』）。

中心人物の一人小田為綱の日記によれば「明治十一年九月十二日 早天馬ニ乗テ弘前獄を押シセラレ青森獄に至リシハ、夜六時懲役部屋第一欄ニ入ル、鹿兒洲罪囚及常事犯人三十余名雑居」十月三日条には

「当分ノ内五ノ檻ヘ我等ヲ遷サル、鹿兒島ノ囚人一人かんニ集リ五十余人、常人犯二、三ノかんニアツメラル」

とあり、西郷一派の反政府運動の根深さ、かつ広範さを示すと同時に、幕藩のつづきのような政治体制であった（前掲森論文）。

(9) 高橋九一編『小保内定身と会輔社の業績』

(10) 檄文は『岩手県史』（第八巻）、『九戸郡誌』、『浦和・小田文書』（森論文所収）に記録が見られる。三者間に若干の記事のちがいがあるので文脈の合うよう修正した。

(11) 小田為綱稿「三陸開拓上言」岩手県立図書館蔵

同時に「陸羽開拓案」（小田文書）も作成している。

(12) 岡田益吉著『東北開発夜話』

(13) 『岩手県史』第八巻

(14) 前掲森論文

(15) 前掲「三戸聖母守護会記録」

(16) 「盛岡十字教会記録」

(17) 葛西富夫著『斗南藩史』

(18) 前掲『概説八戸の歴史下1』

(19) 註(1)文書中にギリシヤ正教徒の反正証書提出者に三戸士族と並んで斗南士族の名が見られる。

(前略)

附紙

(明治六年)
去十二月中三戸滞留ノ教員

先生 仙台士族 大 嶋

東京ニコライ門人 十二月廿四日出立盛岡^{江趣}

社中反正証差出シ候者

三戸 佐藤 連之助

連之助長男 佐藤 良平

岩手県士族 三戸寄留 川村 甚之丞

三戸 諏訪内 源司

同 松尾 五三郎

同 近田 蘭平

同 松尾 五兵衛

同斗南 小野 和助

三戸 佐藤 九郎八

メ九人

函館教会^江入社証書不出者

三戸 宮 喜代太

同 江刺家 其太

甚之丞長男 川村 定次郎

(後略)

(20) 「近代青森県キリスト教史の研究」(一)(二) 「弘前大学国史研究」

五五・五六

(21) 日向 康「仙台とハリストス教―ある信仰―」

(朝日新聞 昭和四十八年八月、郷土通信)

(22) 『日本正教伝道誌』

(23) 同右巻一64頁 刀・妻子を売り、活動の資金とするのも止むを

得ないことであり、余裕のある者は経済的援助を惜しむべきではない、と云っている。

(24) 同右

(25) 同右 巻二73頁

(26) 註(1)青森県庁所蔵文書

(27) 大久保利通文書第三 後藤靖『士族反乱の研究』参照

(28) 全右後藤靖『士族反乱の研究』95頁

(29) 『近代日本総合年表』(岩波書店)明治三年九月六日

(30) 参考までに大正元年版「岩手県統計書」に見える教勢を紹介しておく。ギリシヤ正教(ハリストス正教)の比重の大きさに注意されたい。

天 主 公 教 （カトリック）	ハ リ ス ト ス 正 教 （ギリシヤ正教）	日 本 キ リ ス ト 教 会	バ プ テ ス ト 教 会	メ ソ ジ ス ト 教 会	聖 公 会	組 合 キ リ ス ト 教 会	そ の 他	計	
4	15	4	2	1	1	1	2	30	教会・講義所
3	21	6	2	1	2	1	2	38	宣 教 者
二八三	一七六三	二七五	二〇〇	九六	二二	五四	一〇三	二七九六	信 徒 者